

集落に住む高齢者を取りまく環境に関する考察

新潟県鹿瀬町〈当麻〉における事例研究

正会員 ○井沢 幸 1)
同 黒野 弘靖 2)
同 近藤 正一 3)
同 若山 滋 4)

【研究目的】

本研究は、高齢化の進む農村集落を対象地とし、共同体的な生活形態での人々の交流や、周辺環境との関係を明らかにし、集落に住む高齢者の生活実態とそれを支える要因を明らかにすることを目的としている。

【調査対象地】

〈当麻〉は、阿賀野川の中流山地部に位置する世帯数149、人口433人、老年人口割合が36.2%と新潟県内でも高齢化が顕著にみられる農村集落である。集落は近世から屋敷が立ち、水田を所有する人の住む「カミ組」と、大正期の日出谷駅開設に伴い移住した「シモ組」に分かれ、住宅の特徴として「カミ組」には茅葺き住居が多いのに対し、「シモ組」には瓦屋根の家が見られ、通りに面して商店が多く並んでいる(図1)。

【調査概要】

〈当麻〉に住む高齢者のなかから「カミ組」4名、「シモ組」5名を選び(表1)、一日の生活、行動範囲、人との交流、屋敷周りの使い方についてヒアリングを行い、併せて住居平面図、配置図を採取した。

【分析結果・個人の役割と生活の広がり】

1. イエとしての役割

区長や隣組長などの、集落に対して責任のある立場に就いている高齢者は多い(表1)。また、生産活動の場においても、水田を猿から守る猿当番、用水の調整をする水当番、栗園の管理をする栗当番があり、これらは水田を所有する「カミ組」の住民で担当し、関わっている高齢者も多い(図1)。栗当番には、運営の中心となる責任役員と、主に高齢の人が担当する、金銭の管理に無関係な当番組合員に分けられ、年齢に応じた仕事を用意されている。年齢に無関係に責任のある仕事を受け持つことは、高齢者の生きがいややりがいに繋がっていると同時に、栗園での観光客の応対を通して、集落の将来を考えることにも発展している。

2. 時間の使い方

時間の使い方は昼間の仕事内容によって異なっている。畑を持つ女性は午前中に主な仕事をし、午後は昼寝の時間を長くとり、他の人と比較して朝に重点をおいた生活をしている(図2)。睡眠不足を補うため夏場だけ昼寝をするのは畑を持つ人で、健康維持のため年間を通じて昼寝を取る人とは異なっている(表1)。このように共同作業が多い集落内においても、高齢者の時間の使い方は仕事内容、健康に対する意識の表れなどの長い人生経験で培われた要素によって形成されており、個々に異なるパターンを維持して生活している。

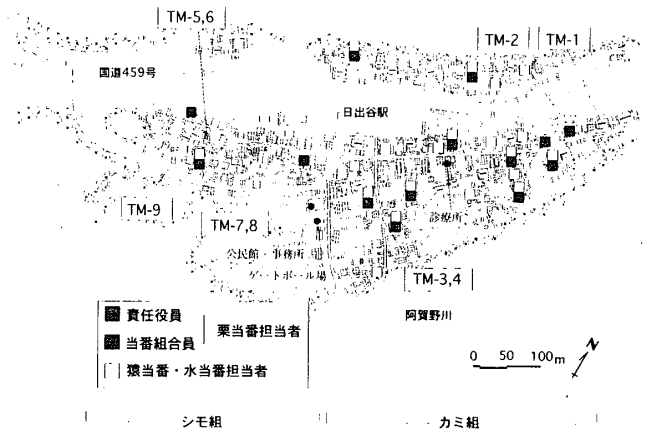


図1 対象者住戸と農作業組織への参加者

表1 対象者の概要

No.	年齢	性別	同居者	職業	水田の有無	各当番の有無	畑の有無	役職	移動手段	昼寝の取り方	
										夏	冬
TM-1	70歳	男	妻、息子夫婦、孫	無	無		無	老人クラブ会長 民生委員	無	2時間	1時間
TM-2	80歳	女	息子夫婦	無	有		有	無	無	1時間	1時間
TM-3	73歳	男	妻、息子	会社員	有	●	有	区長	車	無	無
TM-4	70歳	女	夫、息子	無	有		有	無	無	1時間	無
TM-5	74歳	男	妻、息子夫婦、孫	無	無		有	隣組長	原付	2時間	2時間
TM-6	67歳	女	夫、息子夫婦、孫	無	無		有	無	無	2時間	無
TM-7	80歳	男	妻	無	有	●	有	無	車	無	無
TM-8	80歳	女	夫	無	有		有	無	無	3時間	3時間
TM-9	70歳	男	妻	無	無		有	老人クラブ副長	原付	2時間	1時間

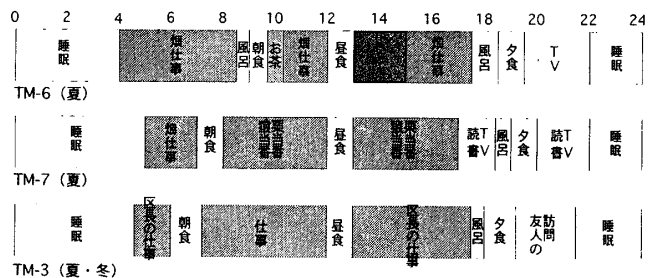


図2 高齢者の生活時間帯

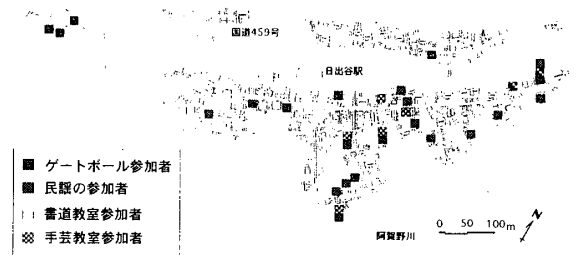


図3 老人クラブ(高砂会)参加者の分布

Interaction between the elderly and environments in a rural community
A case study on "Taima" village in Niigata Prefecture

IZAWA Sachi, KURONO Hiroyasu, KONDO Shoichi, and WAKAYAMA Shigeru

【分析結果-集落居住への展開】

1. 高砂会（老人クラブ）の活動

〈当麻〉の老人クラブは高砂会と呼ばれ、習い事をはじめ温泉旅行や、神社の清掃、集落内の空き缶拾いといった数多くの活動をしている。参加者は、「カミ」「シモ」を問わず畑仕事に従事する人に多く、農作業の組織に比べて、会の活動は集落全体に広がっており、「カミ組」と「シモ組」を繋ぐ役割をしているといえる（図3）。また、新しい事への積極性が薄らいでいく傾向にある高齢者にとって、異なった経験ができる環境を与える契機となっている。

2. 移動手段と行動範囲

高齢者の多くが移動手段として車や原付に頼っており、行動範囲はその有無に左右される。ただし、どの高齢者も日常生活は集落内で完結している。バスや電車の本数は少なく交通は不便であるが、高齢者から強い不満は聞かれなかった。移動手段の無い人は自宅周辺で釣りをする、友人たちとゲートボールを楽しむといった行動が見られ（図4）、車を持つ人は集落全体を使い水田や対岸の山まで出かける、という行動が見られる（図5）。つまり、住み慣れた土地のため山や川、畑といった自分自身に魅力的な場所を熟知し使いこなすことが不便さを感じさせない理由となっている。また、徒歩で移動する人を見かけたら送迎をする人の存在や、水田まで車での移動が可能のように二人一組で当番を行うといった、個人の所有物を集落全体で役立てる協力体制も高齢者にとって集落内で充実した暮らしを送ることのできる理由となっている。

3. 記憶により支えられる環境

普段住宅のなかで過ごすことが多い人は、快適に暮らすために肘掛け付きの椅子を置いたり、趣味の書道の作品を飾ったり、室内に多くの工夫をしている（図6）。しかし、この部屋の空間は室内だけで完結しているのではなく、長年住んでいる集落の住居のなかにあることによって支えられている。日頃家の中にいる人が秋になると栗を拾うために外出し、それが集落周辺の紅葉を思い出すきっかけとなっている（図6）。行動範囲が狭い人は室内の環境だけでなく、現在の自分の居場所よりもっと広い範囲をとりまく昔の記憶によって支えられている部分があることが分かる。

【集落に住む高齢者をとりまく環境】

集落に住む高齢者は生活リズムや仕事、自室のしつらえ方などにおいて自らが決定権を持って生活をしてきた。また、集落全体や家族、隣近所に対する何らかの役割を個人が持っており、それが周辺の人を含めたすべての環境に対して、主体的に関わっていくことのできる要因となっていた。集落は加齢につれて薄らいでいきがちで、役割や自立、人との交流などを多く保持している。そうした環境に支えられて、ここに住む高齢者は深く広がりのある生活が可能となっている。

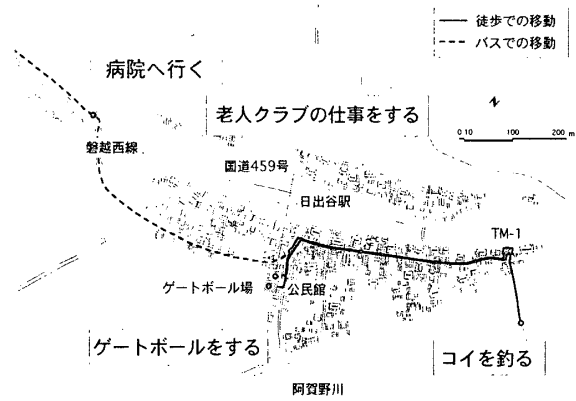


図4 行動範囲 (TM-1:1997年9月)

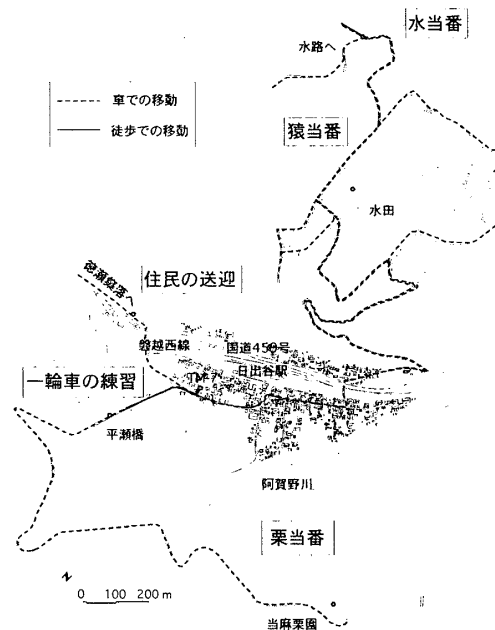


図5 行動範囲 (TM-7:1997年9月)

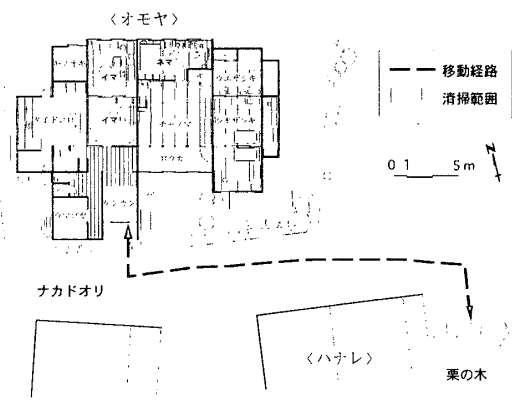


図6 行動範囲 (TM-2:1997年9月)

*1 名古屋工業大学大学院博士前期課程
 *2 新潟大学大学院自然科学研究科 助手・工博
 *3 名古屋工業大学助手・工修
 *4 名古屋工業大学教授・工博

Graduate school, Nagoya Institute of Technology
 Research assoc., Graduate school of science and technology, niigta Univ., Dr. Eng.
 Research assoc., Nagoya Institute of Technology, Master Eng.
 Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.